

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 20 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380870

研究課題名(和文) 過去経験と現在の自己を結びつける「自伝的推論」 - 尺度開発と推論プロセスの検討

研究課題名(英文) Autobiographical reasoning connecting past experiences and present self:  
Construction of autobiographical reasoning scale and analysis of the reasoning process.

研究代表者

佐藤 浩一 (Sato, Koichi)

群馬大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：40222012

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：自伝的推論について、広範な領域の研究をレビューし、自伝的推論の過程と内容という観点から概念整理を行った。それに基づき、自伝的推論尺度を構成し、信頼性と妥当性を確認した。3つの調査を行い、教師に関わる記憶、家族に関わる記憶、成功経験・失敗経験の記憶の想起と自伝的推論尺度、アイデンティティ発達、適心の諸尺度への評定を求めた。その結果、ポジティブ経験はネガティブ経験よりも強い自伝的推論を引き起こすこと、ポジティブ経験に対する自伝的推論がアイデンティティや適応と関連することが見出された。世代や職業選択と自伝的推論との関連も見出された。

研究成果の概要(英文)：Researches on "autobiographical reasoning" were reviewed and the process and contents of autobiographical reasoning were examined. Autobiographical Reasoning Scale was constructed and its reliability and validity was confirmed. In three researches, participants remembered memories of teachers, family members, successful and failed experiences. Participants rated Autobiographical Reasoning Scale and other scales about identity development and well-being. The results showed that positive experiences elicited more autobiographical reasoning than negative experiences, and autobiographical reasoning to positive experiences was related to identity development and well-being. The results also showed relationships of autobiographical reasoning to cohort and job selection.

研究分野：認知心理学

キーワード：自伝的記憶 自伝的推論 適応 アイデンティティ 意味づけ 発達

## 1. 研究開始当初の背景

過去の経験に関する記憶は自伝的記憶と呼ばれ、国外では30年間、わが国でも10数年間を通して研究が蓄積されてきている。自伝的記憶と類義の概念として、エピソード記憶がある。単一の過去経験を思い出すことは、乳児でも、またヒト以外の動物でも可能である。これに対して成人の自伝的記憶には、複数の出来事をつなぎあわせてライフストーリーをつくる、現在や未来の行動を導く、自己を定義する、といった独自性がある。自伝的記憶のこうした独自性をもたらすのは、「自伝的推論 (autobiographical reasoning)」と呼ばれる省察的思考である。

自伝的推論は、「人生の部分部分と自己を結びつけ、過去と現在をつなぐ、自己省察的な思考や語りである」と定義される。自伝的推論に該当する省察的な思考は、自伝的記憶以外にも、ライフストーリー、ネガティブな経験に対する意味づけ、心的外傷後成長、高齢者の回想など様々な領域のもとで検討されている。そこで諸領域の研究を俯瞰して、理論的・概念的な整理を行うことが望まれる。また、「外傷経験に対する意味づけ」のように特定のテーマに限定した尺度はあるが、特定のテーマに限定せずに自伝的推論を捉える汎用的な尺度は無い。こうした尺度の構成が望まれる。

自伝的推論の検討はまだ緒についたばかりである。しかし既にいくつか、自伝的推論と関連する変数が指摘されている。第一は年齢である。青年よりは中高年の方が、過去の出来事と現在の自己を結びつけたり、過去経験から教訓を学んだという認識が強いことが指摘されている。第二は、想起時点での自己である。職業選択という青年期の自己にとって重要なテーマをめぐって、人は活発な自伝的推論を行うことが見出されている。また性格特性や自我発達と自伝的推論の間に関連があることも報告されている。第三は想起内容である。従来、ネガティブな経験に対する意味づけやその適応的な効果が検討されてきた。一方で、人はポジティブな経験に対しても強い自伝的推論を行うという知見も報告されている。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究は以下のことを目的としている。

### (1) 「自伝的推論」概念の整理

自伝的記憶、自伝的記憶の機能、ネガティブな出来事の意味づけ、高齢者の回想、ナラティブ・アイデンティティ、ライフストーリーなど広範な領域の研究を参考に、自伝的推論の概念を整理する。

### (2) 自伝的推論尺度の構成

(1)で整理された概念に基づき、自伝的推論を捉える包括的な尺度を構成し、その信頼性と妥当性を検討する。

### (3) 自伝的推論と自己との関連の検討

現在どのような自己像や価値観・態度をもっているのかということが自伝的推論に影響することが予想される。そこで教職志望動機の強さという観点から、現在の価値観・態度と、自伝的推論との関連を検討する。

### (4) 自伝的推論と経験内容との関連の検討

従来はネガティブな経験(疾病、対人葛藤等)に対する意味づけやその適応的な意義が検討されてきた。しかしポジティブ心理学の知見からも示唆されるように、人はポジティブな経験を自己像の基盤として意味づけたり、成功などのポジティブな経験から教訓を学んだりすることもあると予想される。どういった経験が、どのような自伝的推論を引き出すかを検討する。

### (5) 自伝的推論とアイデンティティや適応との関連の検討

自伝的推論とアイデンティティや適応との関連について、従来は、ネガティブな経験に対する意味づけに限定した検討が行われていた。また、教訓を学んだという狭義の自伝的推論が取り上げられることが多かった。そこで、ネガティブな経験に限定することなく様々な経験の想起を求め、(2)で作成された尺度を用いて自伝的推論を包括的に捉え、アイデンティティ発達や適応との関連を検討する。

## 3. 研究の方法

研究1では文献レビューを行う。研究2～4は20歳代～50歳代の協力者のべ約900名を対象とした質問紙調査研究である。目的1～5と研究1～4の対応は下記の通りである。

- 目的(1) 研究1
- 目的(2) 研究2～4
- 目的(3) 研究2
- 目的(4) 研究2～4
- 目的(5) 研究4

### (1) 研究1

自伝的推論に該当する思考過程を検討した研究を、自伝的記憶の機能、高齢者の回想、ナラティブ・アイデンティティ、ライフストーリー、ネガティブな経験の意味づけ、心的外傷後成長、自己定義的記憶など広範な領域から収集した。諸研究で用いられている評定

法と内容分析の方法を検討し、そこから「自伝的推論」の意味するところを包括的に捉える枠組みを提案する。

## (2)研究 2

参加者 20 歳代 108 名、30 歳代 105 名、40 歳代 89 名、50 歳代 92 名であった。20 歳代は教員養成系学部の大学生であり、30～50 歳代は現職の教員であった。

手続き 参加者は中学時代の教師とのコミュニケーションの記憶と、家族とのコミュニケーションの記憶を一つずつ想起し、具体的な内容を記述した上で、それぞれについて、自伝的推論尺度 26 項目、記憶特性 4 項目（鮮明度、詳細度、当時の感情価、現在の感情強度）に評定した。続いて、大学生は現時点での教職志望の強さを、現職教員は大学時代の教職志望の強さを回答した。最後に日本語版 5 因子性格特性尺度（TIPI-J）に回答した。

## (3)研究 3

参加者 20 歳代 35 名、30 歳代 71 名、40 歳代 71 名、50 歳代 68 名であった。

手続き 参加者はポジティブな経験として過去 1～2 年以内の成功経験を、ネガティブな経験として過去 1～2 年以内の失敗経験を、それぞれ一つずつ想起した。具体的な内容を記述した上で、それぞれについて自伝的推論 26 項目、記憶特性 4 項目（鮮明度、詳細度、当時の感情、現在の感情）に回答した。続いて日頃の回想頻度を問う 2 項目、自伝的記憶の機能を問う日本版 TALE 尺度（自己継続機能、行動方向づけ機能、社会的結合機能の 3 因子）に回答した。また 206 名の参加者は時間的展望を問う日本版 ZUPI（過去肯定、過去否定、現在運命、現在快樂、未来の 5 因子）39 名は内省志向性尺度（内省しやすさ、内省好みの 2 因子）に回答した

## (4)研究 4

参加者 20 歳代 66 名、30 歳代 64 名、40 歳代 56 名、50 歳代 64 名であった。

手続き 参加者は過去 1～2 年以内に経験した成功経験と失敗経験を一つずつ想起し、具体的な内容を記述した上で、それぞれについて自伝的推論 26 項目、記憶特性 4 項目（鮮明度、詳細度、当時の感情、現在の感情）に回答した。続いて日頃の回想頻度を問う 2 項目、日本版 TALE 尺度（ワーディングを一部改訂）、アイデンティティの基礎尺度、アイデンティティの確立尺度、自尊感情尺度、人生満足度尺度に回答した。

## 4. 研究成果

### (1)研究 1

諸領域の研究で用いられている尺度項目や内容分析の方法を整理した結果、自伝的推論は大きく「自伝的推論の過程」と「自伝的推論の内容」に分けて捉えられることがわかった。前者は経験を繰り返し想起し、その意味を考えるプロセスである。後者はその結果得られた意味づけの内容であり、自分にとって重要であるという概括的な認識、出来事と自己が結びついているということをもより具体的に捉える認識、複数の出来事がテーマや因果関係によって結びついているという認識、に分けられた。はさらに、その出来事から学んだ、転機だったなど、出来事が自己にどのように影響したかという認識と、その出来事が現在の自己とつながっていたり、当時や現在の自己を象徴しているという認識、に分けられた。以上の検討をもとに自伝的推論尺度 26 項目を構成した。

### (2)研究 2

因子分析 教師の記憶に対する自伝的推論に関わる 26 項目への回答に対して因子分析を行い（最尤法、プロマックス回転）、教訓・成長因子、リハーサル因子、過去の自己因子、現在の自己因子、重要因子、転機因子、という 6 因子を確認した。信頼性係数は .766～.952 であった。

自伝的推論と教職志望 教師の記憶に対する自伝的推論等の評定を世代ごとに分析した。教訓・成長因子、リハーサル因子、現在の自己因子、過去の自己因子、当時の感情価、現在の感情強度で教職志望の効果が有意であった。ただしこれらの効果は 30 歳代と 50 歳代だけで見られた。30 歳代で学生時代に教職志望が強かった人は、教師とのポジティブな経験を強い感情を伴って想起し、「その出来事が現在の私をよく表している」（現在の自己因子）と認識していた。50 歳代で教職志望が強かった人は、教師とのポジティブな経験を想起し、「その出来事を繰り返し想起し」（リハーサル因子）「その出来事から学んだ」（教訓・成長因子）「当時の私をよく表している」（過去の自己因子）と認識していた。このように、教職に対する態度と自伝的推論の間に、部分的ではあるが関連が見出された。

自伝的推論と世代 教師の記憶に関わる自伝的推論の 5 因子では、世代の効果は見られなかった。家族の記憶に関わる自伝的推論では現在の自己因子で、50 歳代の評定値が 20 歳代よりも高かった。このように世代と自伝的推論との間には明確な関連は見出されなかった。

感情と自伝的推論 経験当時の感情価、現在の感情強度と自伝的推論 5 因子との相関を検討したところ、教師の記憶でも家族の

記憶でも、ポジティブな出来事はネガティブな出来事に比べて、リハーサルされることは少ないが、強い自伝的推論を引き起こすことが示された。また強い感情を伴って想起される出来事の方が、活発な自伝的推論を引き起こすことが示された。

自伝的推論とパーソナリティ 自伝的推論の6因子とTIPI-Jで測定した5因子との相関は $-.13 \sim .09$ と、きわめて弱かった。

### (3)研究3

因子分析 成功経験に対する自伝的推論への回答に対して因子分析を行い(主成分法、プロマックス回転)、影響因子、リハーサル因子、自己因子、重要因子、関連性因子の6因子を確認した。信頼性係数は $.564 \sim .934$ であった。

成功・失敗と自伝的推論、記憶特性 自伝的推論5因子と記憶特性(鮮明度、詳細度、当時の感情強度、現在の感情強度)の平均評定について分析したところ、影響因子、リハーサル因子、重要因子、関連性因子、鮮明度、当時の感情強度、現在の感情強度で、経験の効果が有意であった。成功経験は失敗経験に比べると、これまでリハーサルされることは少なかった。しかし失敗経験に比べると、「この出来事は私の考え方や感じ方に強く影響した」(影響因子)、「この出来事は重要である」(重要因子)、「関連する他の出来事を思い出せる」(関連性因子)など強い自伝的推論を引き起こし、強い感情を伴って鮮明に想起されることが示された。

世代の効果 自伝的推論では、世代の効果は見られなかった。これに対して回想頻度とTALE3因子それぞれの評定は、20歳代が50歳代よりも高かった。

尺度間の相関 自伝的推論5因子とZTPI5因子、回想頻度、TALE3因子との相関を検討した。ZTPIとの関連では、成功経験の自伝的推論(リハーサル因子)と過去肯定、失敗経験に対する自伝的推論(自己因子)と過去否定の間に有意な正の相関が見られ、成功経験の自伝的推論(自己因子、重要因子)と現在運命の間に有意な負の相関が見られるなど、理論的に整合性のある関連性が確認された。ただし成功経験の自伝的推論(自己因子・転機因子・重要因子・教訓因子)と未来の間に有意な正の相関が見られるなど、解釈に留意を要する結果も認められた。自伝的推論と回想頻度との相関は $.089 \sim .301$ 、TALEとの相関は $.067 \sim .273$ であった。自伝的推論5因子と内省志向との間には $.115 \sim .689$ と中程度以上の相関が認められた。

### (4)研究4

研究4は成功経験・失敗経験に対する自伝

的推論を評定するという点では研究3と同じである。そこで、以下～では研究3と研究4のデータをまとめて分析した。

因子分析 成功経験と失敗経験に対する自伝的推論について因子分析を行い(主因子法、プロマックス回転)、成功経験でも失敗経験でも、自己因子、リハーサル因子、転機因子、重要因子、教訓因子の5因子を確認した。信頼性係数は $.823 \sim .895$ であった。

成功・失敗と自伝的推論、記憶特性 自伝的推論5因子と記憶特性(鮮明度、詳細度、当時の感情強度、現在の感情強度)の平均評定について分析したところ、リハーサル因子、転機因子、重要因子、鮮明度、現在の感情強度、他の出来事との関連性について、経験の効果が有意であった。成功経験は失敗経験に比べると、リハーサルされることは少ないが、「転機だった、自分に変化をもたらした」(転機因子)、「大きな意味を持つ、重要だ」(重要因子)など強い自伝的推論を引き起こし、鮮明に強い感情を伴って想起されることが示された。また「他の出来事を引き起こした」「関連する他の出来事を思い出せる」と評定されていた。

自伝的推論と世代 自己因子と教訓因子で世代の効果が有意であり、20歳代の評定が他の世代よりも低かった。

自伝的推論と自伝的記憶の機能 自伝的推論5因子と日本版TALE3因子との相関を検討した。自伝的推論の5因子とTALE3因子の間に概ね、有意な相関が認められた。研究4では研究3に比べて、自伝的推論とTALEとの相関が強かった。また自伝的推論5因子はTALEの社会的結合機能よりも、自己継続機能、行動方向づけ機能と強い相関を示した。

自伝的推論とアイデンティティ、適応との関連 尺度間の相関を検討した結果、特に成功経験に対する自伝的推論5因子とアイデンティティの確立、自尊感情、人生満足度との間に中程度の相関が認められた。自伝的推論5因子との相関は、アイデンティティの確立で $.273 \sim .327$ 、自尊感情で $.036 \sim .249$ 、人生満足度で $.157 \sim .199$ であった。

### (5)研究1～4の成果のまとめ

以上の研究を通して以下の成果が得られた。

第一に、自伝的記憶だけでなく関連する諸領域で利用可能な「自伝的推論尺度」が構成され、その信頼性と妥当性が確認された。因子構造は研究2～4で若干異なるが、データ数が最も多く、成功経験・失敗経験で共通の因子構造が確認され、TALE尺度との関連から妥当性が確認された研究4の5因子が、自伝的推論の構造を捉えるのに適切である。各因子と項目例は下記の通りである。 リハーサ

ル因子(例:この出来事が起こった当時そのことが気になってしかたなかった、この出来事が起こってからそのことについて何度も考えた) 自己因子(例:当時の私がどんな人間が多くを教えてくれる、現在の私がどんな人間が多くを教えてくれる) 転機因子(この出来事は私の人生における転機だった、この出来事は現在の私の中心部分になっている) 重要因子(例:この出来事は大きな意味を持つ、この出来事は重要である)

教訓因子(例:この出来事から教えられることはたくさんある、この出来事から私は大切なことを学んだ)。リハーサル因子が「自伝的推論の過程」に、自己・転機・重要・教訓の各因子が「自伝的推論の内容」に該当する。

第二に、ポジティブな経験はネガティブな経験よりも強い自伝的推論を引き起こすことが繰り返し確認された。研究2では想起された出来事の感情価と自伝的推論の間に相関が見られた。研究3・4では、各協力者がポジティブ経験(成功)とネガティブ経験(失敗経験)を想起し評定したところ、成功経験の方が強い自伝的推論を引き起こしていた。またリハーサル因子だけは、成功経験が失敗経験よりも評定が低かった。このことは、人はネガティブな出来事を反すう的にリハーサルしても意味づけをしにくいこと、ポジティブな出来事は相対的に少ないリハーサルで意味づけられることを示唆している。

第三に、自伝的推論と適応との間に関連性が見出された。特に、ポジティブな経験に対する自伝的推論の活発さが、アイデンティティの確立、自尊感情、人生満足度と結びついていた。このことは第二の成果と合わせて、ポジティブな出来事の重要性を示している。従来は疾病などネガティブな出来事への意味づけに関心が集まっていた。本研究の知見は、ポジティブな経験への自伝的推論という、これまで未検討だった新たな研究テーマにつながる。

第四に、自伝的推論は青年期(20歳代)よりもそれ以降に活発化することが示唆された。世代の効果は全ての研究で明確に見出されたわけではなく、効果が見られなかった研究もあった。しかし効果が見られた研究では一貫して、20歳代よりも上の世代の方が強い自伝的推論を行っていた。生涯発達の視点でさらに検討が必要である。

第五に、自伝的推論と現在の自己(教職志望、5因子性格特性)との間には、弱い関連しか見出されなかった。ただし教職志望が強かった人の方が教師とのコミュニケーション経験を強く意味づけるという結果が得られており、自伝的推論が職業選択という現実的な課題において自己と結びついているこ

とを示している。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

佐藤浩一、成功経験と失敗経験に対する自伝的推論、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読無、第65巻、2016、187-198

佐藤浩一、教師の思い出、家族の思い出に対する自伝的推論 - 世代、教職志望との関連 -、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読無、第64巻、2015、145-156、

<https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/handle/10087/9928>

佐藤浩一、自伝的推論 - 概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案 -、群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編、査読無、第63巻、2014、129-148、

<https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/handle/10087/8357>

〔学会発表〕(計3件)

Sato Koichi、Autobiographical reasoning about successful and failed experiences: Relationship with reminiscence function, identity development, self-esteem, and life satisfaction、31<sup>st</sup> International congress of Psychology、2016.7.24-29、Yokohama, Japan.

佐藤浩一、成功経験・失敗経験に対する自伝的推論、日本心理学会 79 回大会、2015.9.22、名古屋国際会議場(名古屋)

佐藤浩一、教師の思い出、家族の思い出に対する自伝的推論 - 世代、教職志望との関連 -、日本心理学会 78 回大会、2014.9.10、同志社大学(京都)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

佐藤 浩一(SATO, Koichi)  
群馬大学・大学院教育学研究科・教授  
研究者番号: 4 0 2 2 2 0 1 2

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

